

探究学習と大学の学習および将来展望とのレリバンズ :岡山県立岡山操山中学校・高校の 未来航路プロジェクトを事例として

比較教育社会学コース 富田 知世
同上・日本学術振興会特別研究員 DC 日下田 岳史
比較教育社会学コース 鈴木 翔
同上 山口 泰史

目次

- 1 はじめに
 - A 本稿の目的
 - B 先行研究
 - C 調査の概要
 - D 岡山操山高校の研究志向
 - E 本稿の構成
- 2 岡山県立岡山操山中学校・高校の教育理念と未来航路プロジェクト
- 3 未来航路プロジェクトの概要
 - A 学習内容
 - 1 高校での未来航路プロジェクト
 - 2 中学校での未来航路プロジェクト
 - B 中学校と高校の未来航路プロジェクトの違い
 - C 未来航路プロジェクトで育成したい「力」に対する教師の認識
 - 1 高校教師へのインタビュー
 - 2 中学校教師へのインタビュー
- 4 未来航路プロジェクトと大学の学習, および将来展望とのレリバンズ—卒業生へのアンケート調査—
 - A 使用した変数
 - B 系統別課題研究のレリバンズ
 - 1 志望と進学先のレリバンズ
 - 2 大学の学習とのレリバンズ
 - 3 将来展望とのレリバンズ
- 5 まとめ

1 はじめに

A 本稿の目的

本稿の目的は, 岡山県立岡山操山中学校・高校の総合的な学習の時間「未来航路プロジェクト」を事例とし, 公立中高一貫校における探究的な学習に教師が期待する「効果」を, 生徒も同様に認識しているのかを実証的に分析することである。

「未来航路プロジェクト」は次の理由から, 先駆的実践として位置づけることができる。まず, 中高一貫教育を象徴する実践である。岡山操山中学校・高校は, 2002 年度に併設型県立中高一貫校として開校した。新設された岡山操山中学校では, 特色ある教育内容として, 「自己探求活動の充実(「たんきゅう」の漢字は「探究」ではない)」を掲げており, 総合的な学習の時間を利用した「未来航路プロジェクト」の実施をうたっている(岡山県立岡山操山中学校・高等学校 2001『操山』)。「未来航路プロジェクト」は高校においても実践される取り組みで, 中高一貫校教育を象徴する実践⁽¹⁾となっている。

次に, 「未来航路プロジェクト」は, 中学校・高等学校新学習指導要領で強調されている探究学習のモデルとなる実践である。学習指導要領総合的な学習の時間の解説編(2008, 2009)によれば, 探究学習とは, ①課題の設定, ②情報の収集, ③整理・分析, ④まとめ・表現という 4 つの学習過程を繰り返し行っていく学習である。未来航路プロジェクトの学習過程の詳細は第 3 章 A 節で示すが, 探究学習の過程と合致するものである。

最後に, 「未来航路プロジェクト」では, 探究学習で設定するテーマと, 大学の学習や将来展望に一貫

性を有すること、すなわちレリバンがあることが理念とされていた。このような大学入学後を見据えた教育実践を、理念にとどまらず、1 週間の時間割のなかに確保し具体化させようと試みる点においても、先駆的事例といえる。

本稿の目的は、実践事例紹介ではない。たとえば、総合的な学習の時間をめぐる研究はその多くが実践事例報告にとどまっている。本稿は、教師の認識に基づきながら、実践の理念や実践上の困難さについて理解する。また、未来航路プロジェクトを受けた生徒は、教師が意図した実践の理念どおりの「効果」を大学入学後に認識しているのかをアンケート調査によって明らかとする。さらに、教師の認識から見える、中学校と高校の未来航路プロジェクトの違いにも言及する。

カリキュラム・イノベーションが起こるには、新たな実践の具体的中身についての知識も当然重要であるが、それ以上に、新たな実践に対する教師の認識、生徒の認識にどのようなイノベーションが起こるのか、もしくは起こらないのかを考慮する必要がある。本稿は、カリキュラム・イノベーションを学校組織レベルから総体的に理解する材料を提供する。

B 先行研究

探究学習は、高校と大学の教育上の接続を保証する学習という役割を担っている。しかしながら、探究学習を分析軸に加えている研究はあっても、高校での探究学習と大学入学後の学習との連続性—本稿ではレリバンという言葉を用いているが—を検証している研究は少ない。

探究学習を分析軸に加えている研究として特筆すべきものは、ベネッセコーポレーション(1999)による研究である。この研究は、総合的な学習の時間が高校に導入される以前に、先駆的な実践をしていた高校を対象とした研究である。この研究のオリジナルな点は、調査対象校の実践事例を学習活動の内容に応じて分類している点であり、単なる総合的な学習の時間の実践事例報告にとどまらない研究となっている。分類された学習活動の 1 つに課題探究的な学習が含まれている。しかし、この研究は、これら先駆的学習活動を受けた生徒の、大学での学習に対する影響を検証できてはいない。

山田(2011)は、163 大学から 19661 人(うち新入生は 19332 人)を対象にした大規模な新入生調査(JFS)を実施し、新入生の高校時代の学習体験などを把握している。山田は、高校時代の行動や経験に関する項目のなかから以下の 6 類型を抽出している。特に明確な目的、目標のないまま学習をしてきた「無目的型」、高校時代に探求学習を経験しているが、その意味を深く理解していない「探求学習型 A」、高校時代に教師の指導に従順に対応した「高校指導従順型」、自分の明確な意思を持たないまま他律的に受験勉強に臨んだ「受験勉強型 A」、探求型学習を経験し、その意味を理解し次につなげようとする「探求学習型 B」、明確な目的、目標をもって自律的に受験勉強に励んだ「受験勉強型 B」の 6 類型である。山田は、これら学生類型と大学でのリメディアル科目の受講率、利用入試形態との関係との分析にとどまっておらず、やはり、これら学生類型と大学入学後の学習や将来展望との関係の検証は据え置かれている。

探究学習が大学入学後の学習に及ぼす影響について分析を試みているものに、富田(2011)がある。富田は、全国の社会科学系大学 1 年生 1131 人を対象にした大規模調査データを用いて、高校での課題探究学習の経験と、大学入学後の学習行動の関連を検証している。分析結果からは選抜度が高い大学の学生では、高校で課題探究学習を経験している人ほど大学では能動的学習行動をとっていることが明らかとなっている。富田(2011)は高校と大学の教育上の連続性を検証しているが、大規模調査であるため、高校時代の探究学習の取組状況を積極的に取り組んだか否かの回答でしか把握できていない。探究学習の取組状況の、より質的な差異を把握できる変数を設定し、大学での学習や将来展望とのレリバンを検証することが、課題となっている。

中高一貫校に関する研究は豊富な蓄積がある。(1)中高一貫校の組織運営上の課題や実践上の課題を指摘するもの(安藤・根津 2010, 安藤 2005), (2)中高一貫校化がまねく「教育問題」(たとえば、受験の早期化、公立中高一貫校の「受験エリート校化」)を指摘、検証を試みるもの(井島 2005), (3)中学校と高校の「接続」という観点から制度論的に研究したもの(梶間 1998, 大脇 2001, 清水 2001), (4)中高一貫教育導入の政策過程を精査したもの(田中 2006, 菊

池 1998), (5) 中高一貫校の生徒の実態について研究しているもの(西島 2011, 岡島 2009, 荻谷・平沢・堀・安藤 2006)がある。このうち(5)は本稿の目的に近い研究である。

岡島(2009)の研究は併設型中高一貫校1校を事例とした研究である。在校生に対するアンケート調査から「学習意欲」、「ゆとり」をもつ生徒類型を抽出している。「学習意欲」、「ゆとり」は筆者が設定した定義となっている。岡島の研究は在校生の現在の意識を明らかにしているのみであり、かつ中高一貫教育の政策理念が反映されているかについて検証を試みる目的があり、本稿の目的とは異なる。

西島(2011)は、東京都立中高一貫校2校に通う生徒の意識や行動の特徴を、アンケート調査より明らかにしている。特に中学生を対象としている。西島は、中高一貫校教育の政策理念に照らしながら、実態を丹念に把握しようとしている。しかし、一般中学校と当該公立中学校の中学生を単純に比較検討しているだけであり、中高一貫校の特色ある教育活動をとらえた分析にはなっていない。

荻谷・平沢・堀・安藤(2006)の研究は、中高一貫校のテーマ学習、特別学習に着目している。それらの学習への積極度、それらの学習で育成したいと期待している自ら考え表現する力が、知能、学力、地位達成に及ぼす影響について、首都圏の中高一貫校の卒業生を対象にしたアンケート調査から明らかにしている。彼らの研究は、特色ある教育活動である、テーマ学習、特別学習に関する変数を分析に組み込んでいる点で本稿の試みに最も類似する研究であるが、「積極度」でしか取り出していない点が不十分である。

探究学習に関する先行研究、中高一貫校に関する先行研究、どちらにおいても、生徒に与える影響を実証的に分析したものが少ないことに加え、中高一貫校の特色ある教育活動である探究学習の特徴を捉えるような変数の設定ができていないという課題が残されている。本稿は、先行研究が到達していない課題に取り組む。

C 調査の概要

本プロジェクトの調査の構成は、未来航路プロジェクトの「効果」に対する教師の認識を明らかにする第

1次調査と生徒の認識を明らかにする第2次調査から成る⁽²⁾。

第1次調査として、教師の認識をとらえるため、本プロジェクトメンバーは岡山操山中学校・高校の教師に対する個別・複数名インタビュー(7月)、管理職や未来航路プロジェクト担当の教師との複数回の会議(6月～10月)、授業見学(10月)や資料収集(学校訪問時)を実施してきた。これらの調査過程で未来航路プロジェクトの「効果」に対する教師の認識をとらえている。第2章・第3章に知見を提示する。

7月調査のインタビューは、学校全体の考えについてA先生に、未来航路プロジェクト自体の理念や具体的プログラムについては未来航路に携わるB先生、C先生、D先生に、そして、中学校の未来航路プロジェクトについてはE先生と、中学校の未来航路プロジェクト担当経験があるF先生にうかがっている。

第2次調査では、未来航路プロジェクトの「効果」に対する生徒の認識について明らかにした。岡山操山高校を卒業し、現役で進学・進級した場合、2012年度現在大学1～4年生に在籍している卒業生に対するアンケート調査を行い、把握を試みた。アンケート項目は、第1次調査で得られた、教師が認識する「効果」、もしくは期待する「効果」を反映させた項目となっている。本アンケート調査によって、未来航路プロジェクトに対する生徒(卒業生)が認識する「効果」を明らかにできると同時に、教師の期待との一致、もしくは不一致を示すことができる。アンケート調査の詳細は第4章で説明する。

D 岡山操山高校の研究志向

調査の知見を報告する前に、強調しておくべきことは、岡山操山中学・高校の教師が研究志向を持ち合わせていることである。ただし、本プロジェクトにおいては、大半は高校の先生方と交流を行っていたため、以下に述べることは高校の特徴についての言及であることは留意してほしい。研究志向があると判断する理由として、研究事業への参加と、岡山操山高校教師が発行する研究論文集の存在をあげることができる。

岡山操山高校では、中高一貫校化した2002年以降、県や民間企業から研究助成を獲得し研究指定校として、時には研究者と交わりながら実践を行って

きた経緯がある。2004～2006 年度は岡山県教育委員会の事業として、パイオニアハイスクール事業の指定校となり、2006 年度～2008 年度は、福武教育文化振興財団の助成を受け、個性的教育推進事業に取り組んでいる。教科単位でも、国や県の事業における研究指定校として実践を積み重ねている。このような数々の事業への参加が研究志向を培ってきた大きな要因として推測できる。また、研究論文集『操山論叢』が発行されており、2012 年で 46 号を数える。

本プロジェクトは、特に岡山操山高校の教師集団の研究志向に支えられ、実施することができていることは間違いない。また、本プロジェクトに対して調査校の先生方は非常に熱心に協力してくれた。先生方のボランティアな意識があったことはもちろんのこと、本プロジェクトが、調査校において、「業務」としての性格を与えられていたことがそれを後押ししている。未来航路プロジェクトを担当している B 先生は、我々のプロジェクトを業務外のものとはとらえず、本来の業務の一つとしてとらえていると語ってくれたことがあった。本プロジェクトが一部、調査校の資金協力によっても成り立っていることは、調査校において研究という活動が組織の公式的な取り組みの一環として位置づいていることを反映している。

以上のような研究志向を持つ教師に支えられ、本プロジェクトが遂行できたという事実それ自体が重要な知見であることを、まず初めに強調しておきたい。

E 本稿の構成

第 2 章では、岡山操山中学校・高校の教育理念を示す。公立中高一貫校化当時の理念と、現在の教師の認識について言及する。

第 3 章では、中学校、高校それぞれの未来航路プロジェクトにおける具体的学習内容を説明し、未来航路プロジェクトによって生徒に身に付けてほしい「力」についての教師の認識をインタビューより明らかとする。結論を先取りすれば、ここで教師が期待する「力」とは、未来航路プロジェクトにおける学習と、大学入学後の学習や将来展望にレリバンスをもつことができる「力」であった。

第 4 章では、教師が身に付けてほしいと期待する「力」を、生徒も身に付けたと認識しているのか、すなわち、生徒は未来航路プロジェクトの学習と大学の

学習、将来展望にレリバンスを認識しているのかを、卒業生を対象としたアンケート調査によって明らかとする。

第 5 章では第 2・3 章を踏まえ第 4 章の知見の考察とまとめを行う。

(富田知世)

2 岡山県立岡山操山中学校・高校の教育理念と未来航路プロジェクト

中高一貫校の母体となった岡山操山高校の前身は、明治 33 年創立の岡山県立高等女学校と大正 10 年創立の岡山県第二岡山中学校である。両校が昭和 24(1949)年に統合し、岡山県立岡山操山高校となった。岡山操山高校は県内有数の進学校であり、平成 23 年度卒業生の進路先は、国公立大学は岡山大学 41 名他、東京大学 4 名、京都大学 6 名、私立は同志社 22 名、立命館 33 名、早稲田 16 名など、難関国立私立大学に進学する者も数多くいる。

岡山操山高校に岡山操山中学校が創設され、併設型中高一貫校として誕生したのは 2002 年度である⁽³⁾。岡山県内で 3 校目の公立中高一貫校となった。2000 年に中高一貫校化を進めることを提起した答申を岡山県高等学校教育研究協議会が教育長に提出している。2001 年 4 月 11 日付の読売新聞には、その答申を受け、岡山操山高校を含めた数校が中高一貫校化に名乗りを上げたことが記されている。当時の校長、野島淳一氏は「中高一貫を特色にすれば、他校との違いが前面に出ると思った」というコメントを寄せている。同じ記事には、岡山県教育委員会学校教育振興課のコメントも記載されている。「偏差値エリートを育てるつもりはなく、生徒の能力をより高く伸ばせる学校にしたい。エリート教育と才能伸長の教育は似て非なるものだ」と説明している。読売新聞の内容からは、岡山操山中学校・高校はテストや数値で測れる「力」ではない「力」の育成を目指していることがわかる。岡山操山中学校・高校ではその「力」を育成する象徴的实践として、未来航路プロジェクトを位置づけている。

中高一貫校化当時の理念は、今も「異なる」形で教師の認識のなかに浸透している。岡山操山中学校・高校では、テストや数値で測れる学力、進学率、合

格率とは異なる「力」について、教師たちは、その時々で「社会力」といった言葉や、「豊かな心」「高い志」といった言葉を用い、指し示してきていることがインタビュー調査からは明らかとなった。しかし、言葉が違っていても指し示す中身は、テストや数値で測れる学力、進学率、合格率ではない、という点では共通している。

学校の概要が端的に示された案内パンフレットの2012年度版には、中学校・高校ともに「高い志」「確かな学力」「豊かな心」というキーワードが並んでいる⁽⁴⁾。それに加え、高校では、パンフレット以外の資料、たとえばHPや進路指導の手引き、論文集等に、「社会力」という言葉が見受けられる。この「社会力」という言葉は、数年前に重要な教育理念のキーワードとして、高校の教師集団内では共有されていた。高校では『操山論叢』という教師による研究論文集が発行されていて、2012年で46号を数える。2007年の『操山論叢』には、岡山操山高校に12年間勤務したある教師の回顧録が載せられており、以下のような記述がある。

(パイオニア事業をきっかけに)本校のあるべき姿を再認識し、生徒一人ひとりの個性を見つけ、さらにそれを伸長し、豊かな人間性をはぐくみ、社会力を身につける「個性教育」を押し進めていくことが本校の使命であるという共通認識ができあがったと思う。(岡山県立岡山操山高等学校

2007年『操山論叢』第42号, p.10)

岡山操山高校のA先生も、研究助成を受けていた当時、「社会力」をめぐり、岡山操山高校の教師たちは文献を読み、学びあいを行うなど、研究熱心であった様子を語っている。第1章ですでに述べた、岡山操山高校の研究志向は、この頃に醸成されたと考えられるが、そのときに「社会力」という言葉も組織内で共有されることになった。A先生によると、「社会力」はある教師が強く提唱していた言葉であったという。その教師による定義が、2009年の『操山論叢』に以下のように記載してある。

「社会力」は、社会に協調できる消極的な社会性だけではなく、社会をより良く変革していく積極的な社会性を伴った実践力と定義する。(岡山県立岡山操山高等学校 2009年『操山論叢』第43号, p.21)

しかし、現在では「社会力」という言葉は教師集団の中に共有されなくなってきており、代わりに「高い志」「豊かな心」といった言葉が多用され現在に至っていることをA先生は指摘する⁽⁵⁾。「豊かな心」「高い志」が指し示す具体的内容については、未来航路プロジェクトで育成したい「力」の中身に焦点化し、第3章C節で明らかにする。

(富田知世)

Table 1 岡山操山高校 未来航路プロジェクトのプログラム

		学習テーマ
1 年 生	4月	総合学習の導入, 基本的学習方法, 自己の理解
	5月	職業研究
	6-7月	話し方・聞き方の学習(弁論)
	8-10月	大学学部・学科研究
	11-12月	ディベートの学習
2 年 生	1-3月	異文化理解, 進路系統別課題研究(事前準備)
	4月	進路系統別課題研究(事前準備), 異文化理解(修学旅行事前研究)
	5-6月	異文化理解(修学旅行事前研修)
	7-1月	進路系統別課題研究

3 未来航路プロジェクトの概要

A 学習内容

1 高校での未来航路プロジェクト

<学習プログラム>

高校では次のような学習プログラムが用意されている。学習方法の習得、職業研究、話し方・聞き方学習(弁論)、大学学部・学科研究、ディベート、異文化理解、進路系統別課題研究というプログラムを、左記にあげた順で2年生の1月まで行っていく。話し方・聞き方学習(弁論)、ディベートはコミュニケーション系の学習として扱われている。それぞれの学習プログラムのつながりについて、未来航路プロジェクトに携わっていたC先生は、職業研究、学部・学科研究を経て進路意識を醸成し、自身の進路に基づき課題研究のテーマを決めるというつながりが意図されていると説明している。コミュニケーション系のプログラムとのつながりは、当初の理念では、「研究して分かった事を伝えるためのツール」という位置づけが与えられ、つながりが意識されたという。Table 1は平成24年度高校1年生と2年生のスケジュールとなっている。進路系統別課題研究が1年生の1月からスタートし、2年生の1月まで時間が用意されている。

<学習形態>

1年生のプログラムでは、主にホームルーム単位で学習を行う。新たなプログラムを始める際のオリエンテーション、講演会や発表会への参加などの場合には学年全体で学習が行われる。平成24年度1年生の場合、1年間で70時間あるうち、学年全体で行われる時間は19時間となっている。2年生のプログラムの学習単位はホームルーム、学年全体のほかに、コース別と系統別という単位も用意されている。コース別とは修学旅行のコース別の単位であり、この単位で活動するのは修学旅行の前の2時間のみである。系統別というのは、生徒が進学を志望している学問系統別ということを指しており、進路系統別課題研究における学習単位となっている。この単位で活動するのは14時間で、2年生は合計35時間用意されているので、合計時間数の約半分は系統別の単位で生徒は学習を進めていくことになる。

<系統別課題研究の学習過程>

1年次1月からスタートし、約1年間取り組むことに

なる系統別課題研究では、以下のような学習過程を踏んでいく。系統別課題研究の学習過程が、未来航路プロジェクトの探究学習の過程である。未来航路プロジェクト担当教師の配布資料の説明を、筆者が引用・編集したものを示す。

(1)情報の収集

先行研究事例の収集。先行研究の代表的な書籍を最低3冊は読む。断片的なWeb情報ではなく、きちんと書籍を読んで、研究の流れや背景、他の研究者の意見などを押さえておくことが大切です。

(2)仮説の設定

先行研究から何がわかったか、何がわかっていないのかを書き出してみよう。友人や先生に相談して、アドバイスをもらおうといいでしょう。仮説とは、自分のテーマをより具体化し、疑問点を明確にし、その答えを予想する、ということ。

(3)研究手法の選択

1. 文献研究:歴史的なことや技術の発達論などを調べるのに適している。読解したことを比較、継承し、自分の頭の中で組み立て直し、自分の言葉で理解し、新しい事実があればそれを検討して論文にします。

2. 実験と実証的研究:理系の学問で一般的になされているのがこの実証的研究といわれるものです。どのような実験が必要か考えましょう。実験データ(数値)をどのように分析すればいいか、あらかじめ先生に相談しておきましょう。どのような数値が得られれば「有意」であるかを知っておく必要があります。

3. 調査分析:アンケート調査はこの分類に入ります。①調査対象は誰か。また人数はどの程度か。(対象はその集合を代表する集団であることが必要)、②どのような環境で調査するか。(特定集団に同時に調査するのか、街頭で調査するのかなど)、③調査項目は何か。また回答形式は選択形式か記述形式か。④多くの項目を調べる場合、最終的にはどのような統計処理を行うのか。

上記(1)～(3)の具体的手順を踏み、研究を進め、最終的には論文を作成する。論文作成方法について

でも、学術書を参考に作成された資料を、教師は生徒に配布している。さらに論文執筆後は、発表会に向けた要旨作成、発表資料の作成が行われ11月下旬以降から発表会が開催される。問いを設定する、先行研究をまとめる、仮説を設定・検証する、成果を論文にまとめる、成果を発表するという本格的な研究活動を、高校生が疑似体験できる学習プログラムが組まれている。

2 中学校での未来航路プロジェクト

中学校の未来航路プロジェクトは、高校で行われている系統別課題研究にあたる学習過程、すなわち探究学習に力点を置いた取り組みといえる。研究テーマは複数設けられ、そのテーマごとに探究学習も繰り返される。

学校の概要について記されたパンフレットや提供資料には、3年間をとおして、「多様な社会に触れ、多様な価値観を養う」ことを目標に、1年次から3年次にかけて「学校について知ろう」「岡山について知ろう」、「日本について知ろう」、「自分の課題を追究しよう」というテーマに基づき学習活動が行われていることが記されている。特に「自分の課題を追究しよう」は3年次に1年間かけて取り組む個人研究活動となっている。生徒は、3年次ではもちろんのこと、1年次から各テーマのもと以下の学習過程を繰り返し経験することになる。以下は提供資料からの引用である。

(1)課題設定

各学年のねらいを実現するため、共通テーマを設定する。共通テーマから個人またはグループで調査・追究すべき課題を設定する。何に疑問を抱いたか。

※何を調べるのか。調べるのに値するものか。

(2)調査・追究活動の計画立案

どのように調べるのかその手段、方法、期間等について計画を立てる。

※書籍、インターネット、アンケート、取材、体験、他

(3)調査・追究活動／体験活動

計画に従って、調査・追究する。(校外体験学習を含む)

※体験的な活動…取材、現地調査、実際に体験

する、他

(4)まとめ・資料作成

調査結果をまとめ、発表資料を作成する。

※グラフ、図、絵、新聞、レポート、他

(5)発表会

効果的な方法を選択して発表する。クラス、学年、またはグループで。時には専門家を招いて、発表内容について意見をいただく。

(6)反省、評価

調べ学習で分かったことや身に付いた力を自分で反省、評価する。次の未来航路プロジェクトへ生かす。

<学習形態>

学習形態は、初めはグループで行うが、最終的には個人で研究を進める。ときには、ある生徒の知見を、別の生徒が取り入れたりする場合もあるという。研究活動の形態に対して教師から指示を出し、拘束をするようなことはしていないということであった。

B 中学校と高校の未来航路プロジェクトの違い

未来航路プロジェクトは中学校と高校の両学校段階を越えた連続的実践となることが目指されている。しかし、中学校と高校の未来航路プロジェクトの実践には異なる点がある。それは、教育課程上の時間数の違い、未来航路プロジェクトに占める探究学習の時間数の違い、学習環境・設備の違い、運営方法の違い、実践に対する教師の価値づけの違いの5点から説明できる。

まず、学校全体の教育活動に占める時間数が大きく異なる。中学校は、1年次60時間、2・3年次それぞれ70時間確保されているが、高校は1年次70時間、2年次35時間となっている。

さらに、中学校と高校の未来航路プロジェクトの学習内容で大きく異なる点は、探究学習にあたる学習活動の未来航路プロジェクト全体に占める割合である。中学校では1年次から3年次まで計3回(過去は計4回)探究学習は繰り返され、最後の1回は1年間かけてなされるのに対して、高校では2年次の1回のみで、その期間も1年間は与えられていない。高校では、残りの活動で、既に示したように「コミュニケーション」と呼ばれる内容を行っている。岡山操山中

学校・高校のどちらも勤務経験があり、調査当時、高校に勤務していた C 先生によると、高校では当初、未来航路プロジェクトとは別にコミュニケーションという科目があり、そこでディベートや弁論が行われていたが、時間が無くなってしまったため未来航路プロジェクトと統合し、現在に至っているという。

学習環境・設備面でも中学校と高校では異なる。中学校では1学年の人数が少ないということもあるが、1学年全員が一度に使える分の PC が完備されている。一方、高校では充実した設備が整っているとは言い難い。未来航路プロジェクトに携わっていた D 先生は、すべての生徒が実験や、アンケート調査などの「実地研究」を行いたいといった場合は、対応が難しいと語っていた⁽⁶⁾。たとえば理系の実験は、実験器具や設備が整っていないと当然できない。

そして、運営方法についても違いがある。担当教師の担当期間について、中学校では主力となる教師が長期間担当している。たとえばインタビューをした E 先生は、4 年間担当している。それに対して、高校では、主任は 1 年で変わってしまうことも多いという。それは、高校では他の校務分掌の方が優先されてしまい未来航路プロジェクトの担当教師を安定して配置できないという理由がある。それら校務の「隙間」で担当教師は未来航路プロジェクトの仕事を行っていかざるをえない現状がある。

また、中学校では、未来航路プロジェクトは学校の教育活動の中心的存在といえるが、高校では決して中心とは言えない。それは県内有数の進学校として、テストなど数値で測れる「力」の育成にも力を入れなければならない使命があるからである⁽⁷⁾。以下の語りは、未来航路プロジェクトに携わる B 先生の語りである。B 先生は、未来航路プロジェクトの重要性を認識しつつ、一方で教師全体の未来航路プロジェクトに対する価値づけが、進学実績を上げることに対するものと比べ相対的に低くなってしまっている現状を指摘する。

(筆者)先生方全体としての今時点での未来航路の位置づけとしては、感触として意味あるなっている部分もありつつ、どうなんだろうと不安に思う部分もありつつ…

(B 先生)そうですね…省略…だからものすごくこ

う、たとえば学校の中で学校目標と並ぶくらいの価値を高いところにいる人はあんまりいないのではないのかなと。そうなるべきものなのかっていうのもまだ僕の中では結論が出てないものではあるんですけども、そうあるべきものだったらもうちょっと組織改革はいるだろうなというのはまあ実感、本音ですね。そのためには本当にこれ(未来航路プロジェクト)をやる事の、意義というか、やったらどうなったのかという検証ができてみんながこれに納得しないとこの価値は上がって来ない。単純に進路実績が上がってて数が出るだとか、それから生徒が実際に希望する進学先に行けて喜びを表しているだとか言うすごく分かりやすいものよりもかなり価値は低くなるのはそれはいまは当然だと思います。その部分が、いやいやそうではないんですよって、…省略…その辺も今の時点でこう見えてるんですよって言うことが出来ていけば価値が上がってくる可能性はあると思います。

このように、高校側では未来航路プロジェクトに力を注ぎにくい状況があるとことを、中学校の E 先生と F 先生も指摘する。それは、中学校の未来航路プロジェクトで意図することが、高校では忘れ去られるのではないかと、という懸念とともに指摘されている。

(E 先生)——で、これ(中学校の未来航路プロジェクト)やらせることによって、実はその勉強のモチベーションというか、何のために学ぶのかっていうのが分かたりして、自ら学ぶ意欲が生まれてきて、先取り学習なんかでガチガチしなくても、自分で勉強できて学力つく、というところを狙ってるんよ。ところが高校になったら、その部分が忘れ去られるというか、どうしてもその外進生もおるから、それらの関係で普通の、普通科高校のレベルでやってることしかできてなくて、中高一貫校らしさがそこで一旦途切れてしまう。(高校では)やっぱりその受験勉強用にしっかり時間を割かないけんし、補習もせねばいけんしいう中で未来航路は、もう少なくとも三年ではしないし、二年でまあ短い時間で効率よく発表もまとめさせて、もう発表したらそれでおしまい。

中学校と高校における未来航路プロジェクトの違いは、以上のように、教育課程上の時間数の違い、未来航路プロジェクトに占める探究学習の時間数の違い、学習環境・設備の違い、運営方法の違い、実践に対する教師の価値づけの違いという5点に集約できる。このような実践上の具体的な違いがある一方で、未来航路プロジェクトによってはぐくみたいと考える「力」が指し示す内容は中学校、高校である程度共通している。

C 未来航路プロジェクトで育成したい「力」に対する教師の認識

本章では、7月に行った岡山操山中学校・高校の教師へのインタビューから、学校の教育活動全体や、未来航路プロジェクトにおいて、はぐくみたい力についての中学校・高校それぞれの教師の語りを紹介する。インタビューで共通してみられた認識は、探究学習のテーマと大学での学習や将来展望を一貫させること、レリバンスを見出すことができる生徒を「望ましい」ととらえる教師の認識である。

1 高校教師へのインタビュー

A先生に対して、岡山操山高校の教育活動全体で育てたい力について質問した。以下で引用する語りの前に、A先生は「操山システム」という操山高校の教育体制をあらわすキーワードについて言及している。学校の概要を示すパンフレットにも「操山システム」という言葉が掲載されている。「操山システム」について、A先生は教育課程編成に限定できない「大きな意味でのカリキュラム」と理解し、岡山操山高校におけるすべての教育活動がうまく回る、つまり「操山システム」がうまく回ることによって、「確かな学力」「豊かな心」「高い志」が育まれることを理念的に目指している。「『操山システム』がうまく回る」ということには、総合的な学習の時間を利用した未来航路プロジェクトの実践が効果的なものになっているということも当然意味されている。そのような「操山システム」がうまく回った場合に、A先生が生徒に身に付けてほしい力とは、大学進学が可能になる学力、いわゆる数値で測れる「力」はもちろんのこと、それに加え、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力^⑧、社会貢献意識といった能力・意識をあげている。A先生

は、特に、社会貢献意識が大学入学後の学習や、卒業後の将来展望につながっていく、つまりレリバンスをもつことを期待している。岡山操山高校は、将来展望から大学で「学びたいこと」を見つけるプログラムとして未来航路プロジェクトを用意している。

続いて、未来航路プロジェクトの、特に系統別課題研究ではぐくみたい力について、未来航路プロジェクトの主担当経験者のC先生にうかがった。未来航路プロジェクトにおいて、「研究するとはどういうことなのか」ということを理解してほしいと話す。

(C先生)——結局専門的な内容に踏み込んでくというよりも、ここで理解して欲しいのは研究するってどういうことかっていうことを身につける。だから研究の中身そのものよりも、研究のスタイル、研究するってどういうことやねんっていうのが、普通、高校で分かんないじゃないですか、大学入って初めて分かる。ただ、学校の先生って大学出てるからある程度研究ってどういう事かわかってるひとたちじゃないですか。そういう意味で指導してもらえれば、(たとえば)医学的な内容を深めていけなくてもまあそこはかまわないかなと。

C先生が個人的に評価する生徒の姿は、「自分のなかから出てくる問題意識」を持つ姿である。その意識とは、つまり、生徒の身近なところに疑問の起点があるということ、そして、最終的にその問題を、学問的問題、社会的問題に拡張していける意識、またそれが将来の自分の進路にも関係してくる意識を指している。C先生は、印象的であったある生徒の例を挙げている。その生徒は部活動で砲丸投げをしており、どうしたら遠くに砲丸を飛ばせるのか、という疑問を物理学的に解明することを試みた。その生徒は、将来、物理学の研究者になりたいという希望もあり、このような疑問が生まれたとC先生は理解している。C先生は、進路選択、系統別課題研究のテーマの一貫性を重要視している。

C先生と同様に、未来航路プロジェクトの系統別課題研究の評価のポイントとして、「問題意識」に言及していた先生がいる。D先生である。D先生は、「テーマの明確さ」は進路学習が深まっている生徒ほどは

っきりしていると指摘する。D 先生も、進路選択と系統別課題研究のテーマの一貫性を重要視している。ここでいう「明確」とは、「自分の意見」があることと D 先生は理解している。

(D 先生)——ちょっと興味を持ってみたいくらいだと本当に調べ学習で終わってしまいますね。だから去年の 2 年、いまの 3 年生で多かったのはやっぱり大震災があったあとなのでたとえば地震に強い家を調べたい、とか放射能について調べたいとか、で、放射能について調べたいくらいだったらインターネットからひいてくるとか、専門の参考書ぱらぱらとみたらかいてある事なので、いわゆる他人が調べた事を自分が新しい知識として得るだけなので…だから浅い。ほんとにコピー&ペーストで終わっちゃうとか自分の意見何処にもないとか。

その他に、D 先生は、個人的に評価できる点として、「調べ学習より一歩外に出た」、「アンケート調査などの実地調査」をしているかどうかをあげている。この点は、後述する中学校の先生たちの評価観点にも挙げられている。

2 中学校教師へのインタビュー

以下の語りは、筆者が、未来航路プロジェクトにおいて「優秀」と思う生徒の特長について質問した際の E 先生、F 先生の回答である。F 先生は明確に、「将来的な目標が、早くからある子」と答えた。そして、その目標が、大学の学問分野の選択、大学卒業後の職業選択にもつながっていくことを期待している。中学校でも課題研究のテーマと進路選択、将来展望に一貫性がある生徒が「望ましい」ととらえていることがわかる。その期待を語る際、F 先生は、印象的な学習成果を残した過去の在学生の作品を見せながら具体的エピソードを例示してくれている。

(筆者)未来航路をやっている、どのような生徒が優秀だと思いますか。

(F 先生)やっぱりその将来的な目標が、早くからある子は。まさにこれですよ。いま話をしていた子は、栄養学をやっている試作品をつくって。「じ

ゃがひじき」という。これがあれかな、大塚製薬なんかにも持っていったやつじゃないかな。それからこれが、三年生のトレーニングをずっとやっていると。どんなトレーニングをすればいいかトレーニング内容をきめて、まあ持ってってと。

(筆者)表とかも全部自分で

(F 先生)全部だいたい自分で作成したり。で、実際に友達にやってもらったりして。自分でもやってみたりして。心拍数はかったり。これは別の子なんですけど、やはりこの子も一年生のころから幼児教育という興味関心があって、調べたのもそんな感じで。ずっとこう、まあ幼い頃からの夢ですよ。二年生とか三年生で外に行く機会はあるけど、一貫してそういうところで資料集めをしていて。この子はあれ、園庭かな。園庭を提案するっていう。実際の園庭をつくって

(E 先生)模型作ったよな、発表会で。

(F 先生)そう、もう普通のジオラマ作って。発表会ではね。これを作っておいて、事前に。で、あの東京研修なり京都研修行くとき持って行ってこれを、大学の先生に直接意見を聞くと。でアドバイスを貰うと——

紹介された生徒の学習行動には、企業に足を運び学習成果を紹介する、大学の先生を訪問し自分の学習に対してアドバイスを受けるなど、中学校という場所・人間関係にとどまらないより専門的内容に踏み込んだ学習行動が含まれている。この点に関して F 先生は、「優秀」とみなす要素として自覚的に語っているわけではないが、その要素として意識していることは推測できる。以上は、非常に「優秀」な生徒の例であったが、もちろん、未来航路プロジェクトの学習でうまく成果を出すことができない生徒もいる。うまく成果が出せない生徒について、インタビューでは、「一貫したテーマを持つことができない生徒」として語られ、その原因についても「目標をもっていない」という点があげられ、「目標をもつ」ことの重要性が繰り返し強調されていた。

また、「目標を持ち」、未来航路プロジェクトの学習でも「一貫したテーマをもっている」生徒は、大学を目標達成のための通過点ととらえる傾向にあることを、F 先生は指摘する。そのため、大学には進学できた

が中学校の未来航路プロジェクトの学習でテーマが定まらなかった生徒の大学入学後の行く末を案じていた。大学入学後も「目標」に向かって学習をし続ける姿が期待されていた。

(F 先生)———どないしようもないような三年間、ホント苦労してコロコロコロコロ総合変わってきた子のなかにも、大学はしっかりしたところ行く子もいます。だからなんとなく卒論書いたなーと思う、あと使わんじやろなっていう子もいて、そのまま勉強はしっかり頑張る。ただその、どこかで目標はできていけばいいけど、そのへんはずっと気になるところで、一番知りたいのはそのところ。目標持った時に、まあその子らにとっては大学がいちおうゴールになってしまうと、たとえばこの子であるとかこの子であるとかは、大学は通過点なんですよ。彼なんかの場合には、日本におったんではできないっていうのを今から思ってるし。

中学校・高校の教師へのインタビューを紹介してきたが、紹介した教師の語りにも共通していることは、未来航路プロジェクトにおける探究学習のテーマと、大学での学習や将来展望を一貫させること、レリバンスを見出すことができる生徒を評価している点である。それでは、教師が期待するような未来航路プロジェクトの「効果」を生徒も同様に認識しているのだろうか。
(富田知世)

4 未来航路プロジェクトと大学の学習、および将来展望とのレリバンス—卒業生へのアンケート調査—

本章の目的は、岡山操山高校在学中に経験した未来航路プロジェクトと大学の学習、さらには将来展望とのレリバンスの有無を明らかにすることである。前節までの分析から、未来航路プロジェクトの中でも特に、系統別課題研究が、大学の学習等へのレリバンスを持つことが、高校側から期待されていることが浮かび上がってきている。そこで、当該2種類の学習活動を通じた経験に着目しながら、未来航路プロジェクトと大学の学習等とのレリバンスを実証的に把握していきたい。

このような関心に基づき、岡山操山中学校・高校の協力を得て、2009年3月～2012年3月高校卒業生を対象とするアンケート調査を郵送法により実施した。岡山操山高校が把握している2012年度浪人中の卒業生は対象に含まれていない。ただし、学校が把握しきれない浪人中の卒業生でアンケートが回収された場合は、分析から除外している。郵送数は1010票、回収率は30.9%、有効回答数は312である。このサンプルには大学に進学しなかった卒業生も含まれているが、以下の分析は大学進学者のみを対象としている。

A 使用した変数

高校訪問調査等を通じて、生徒の高校在学時の系統別課題研究への取り組みを捉える変数⁽⁹⁾として、Table2・3に示す質問項目を設定した。

Table 2 系統別課題研究のテーマ(ダミー変数, n=301)

	度数分布
もともと関心があるテーマがあった	54.2%
課題研究に取り組むうちに関心のあるテーマを見つけた	22.9%
他の人にテーマを決めてもらった	3.0%
独自性のあるテーマを見つげられた	11.6%
なかなかテーマが決まらなかった	24.9%
途中でテーマを変更した	8.0%
大学で学びたい学問分野と関連のあるテーマだった	38.2%

Table 3 系統別課題研究の進め方(n=301)

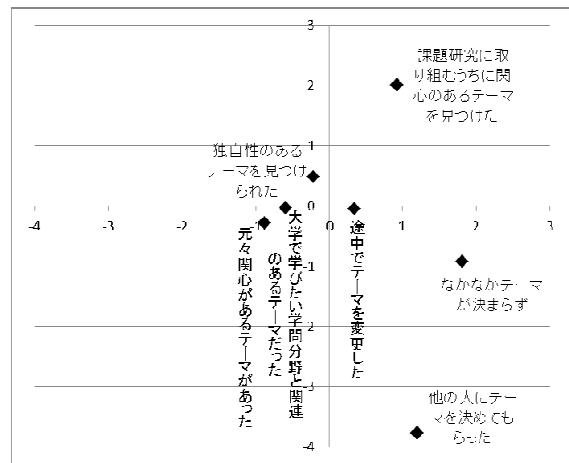
	とてもした	まあした	あまり しなかった	まったく しなかった
本を読む	25.2%	48.8%	19.9%	6.0%
友達に相談する	6.6%	31.6%	42.5%	19.3%
先生に相談する	13.6%	33.2%	35.5%	17.6%
親に相談する	6.0%	18.9%	36.5%	38.5%
インターネットで調べる	50.5%	42.5%	4.3%	2.0%
学外の専門家に相談する	2.7%	4.7%	25.2%	67.4%
実験・アンケート調査を行う	5.3%	9.0%	25.6%	60.1%

系統別課題研究テーマは、どのように決定されているのであろうか。その手がかりを把握するために Table2 の、7 つのダミー変数に対して数量化理論Ⅲ類を適用して、テーマの決定方法を分類する軸の抽出を試みた。なお、当該 7 つのダミー変数の全てについてゼロをとるケースは、分析から除外した。数量化理論Ⅲ類を適用して得られた第 1 軸を横軸に取り、第 2 軸を縦軸にとって各変数をプロットしたものが、以下の Figure 1 である。

第 1 軸の両極には、負の方向に「元々関心があるテーマがあった」がプロットされ、正の方向に「なかなかテーマが決まらず」がプロットされているという特徴を持っている。このことから、第 1 軸は「研究関心の潜在度」を示していると考えられる。研究関心の潜在度が高い生徒ほど自分の関心に気付かないために「なかなかテーマが決まらず」、他方、研究関心が既に顕在化している生徒ほど「元々関心があるテーマ」をそのまま系統別課題研究のテーマとして設定することができると思える。

第 2 軸の両極には、正の方向に「課題研究に取り組むうちに関心のあるテーマを見つけた」がプロットされ、負の方向に「他の人にテーマを決めてもらった」がプロットされている。このことから、第 2 軸は「研究関心の設定力」を示していると考えられる。研究関心の設定力が高い生徒ほど、最初から顕在的な研究関心を持っていないとしても、自分の研究関心を発見することができ、他方、研究関心の設定力が低い生徒ほど、「他の人にテーマを決めてもらった」という受動的なテーマ設定を行う傾向があると解釈できるだろう。

Figure 1 系統別課題研究テーマの分類
(数量化理論Ⅲ類)



それでは Table3 に示した、系統別課題研究の進め方にはどのような特徴が見出されるだろうか。度数分布から明らかなように、高校生にとって、「学外の専門家に相談する」および「実験・アンケート調査を行う」という活動には大きなハードルがあることが窺われる。また、「インターネットで調べる」ことはかなり一般化している様子が顕著である。

このように、系統別課題研究の進め方は、より少数の種類に集約することが可能であるとみられる。そこで、4 件法による各変数を間隔尺度変数として仮定した上で、当該 7 変数について主成分分析を行った。なお、主成分分析の実行時には軸の回転を行わないことが少なくないが、結果の解釈を容易にすることを目的に、バリマックス回転を行った。

Table 4 系統別課題研究の進め方の分類
(主成分分析, バリマックス回転)

変数	主成分	
	1	2
友達に相談する	.731	.080
先生に相談する	.613	.390
親に相談する	.586	.230
本を読む	.576	.094
インターネットで調べる	.545	-.270
実験・アンケート調査を行う	.000	.799
学外の専門家に相談する	.209	.766
寄与率	27.514%	21.702%

第1主成分と関連が大きい5変数は、系統別課題研究を進める時に限らず、様々な場面で活用される、汎用性の高い情報収集行動を意味していると考えられる。第1主成分は、「汎用的な情報収集行動」と名付ける。第2主成分と関連が大きい2変数は、度数分布にも表れていた通り高校生にとってはハードルの高い、言わば大学生の学びに近い、専門性の

ある情報収集行動を意味していると考えられる。第2主成分は、「専門的な情報収集行動」と名付ける。

以上の分析から得られた「研究関心の潜在度」、「研究関心の設定力」、「汎用的な情報収集行動」および「専門的な情報収集行動」を、生徒の系統別課題研究への取り組みに係る独立変数として設定する。そして、以上の独立変数との関連を把握する対象となる従属変数は、高校訪問調査等を通じて、Table 5-7のように設定した。これらの諸変数、および男子ダミーや内進生ダミー等の属性変数の記述統計量および相関係数は、Table 8・9の通りである。4件法の順序尺度は、間隔尺度と仮定して分析を行っている。

なお、「専門的な情報収集行動」は、前章で示した中学校のF先生、高校のD先生の発言からもわかる通り、教師が評価する生徒の行動でもある。したがって、「専門的な情報収集行動」に着目し、分析結果を示すことにする。

Table 5 志望と進学先の一致(n=303)

	一致	不一致	未定
高3・10月時点で学びたかった学問分野と現在専攻の学問分野の一致	75.9%	15.8%	8.3%

Table 6 大学の学習(n=299)

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
未来航路プロジェクトは、大学のレポート執筆に役立った	13.7%	24.1%	37.8%	24.4%
未来航路プロジェクトは、大学でのプレゼンテーションに役立った	10.0%	24.4%	40.1%	25.4%

Table 7 将来展望

(n=300)	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
未来航路プロジェクトは、希望する職業を考えるのに役立った	16.0%	33.7%	33.3%	17.0%
(ダミー変数, n=302)	ある			
将来就きたい職業がある ⁽¹⁰⁾	59.6%			

Table 8 変数の記述統計量

	研究関心の潜在度 (数量化理論Ⅲ類第1軸)	研究関心の設定力 (数量化理論Ⅲ類第2軸)	汎用的な情報収集行動 (第1主成分)	専門的な情報収集行動 (第2主成分)	進学先の一致 高3・10月時の志望と 大学のレポート執筆に 役立った	未来航路プロジェクトは、 大学のプレゼンテーションに 役立った	未来航路プロジェクトは、 希望する職業を考えるのに 役立った	現在、将来就きたい職業が ある	男子ダミー	内進生ダミー	蔵書数	高校文系ダミー	高校3年時の校内成績	大学の学年
度数	297	297	301	301	278	299	300	302	303	285	302	304	305	
平均値	.06	-.02	.00	.00	.83	2.27	2.19	2.51	.40	.52	4.10	2.95	2.30	
標準偏差	1.13	1.15	1.00	1.00	.38	.98	.93	.96	.49	.50	1.76	1.23	1.12	

Table 9 各変数間の相関係数

	① 研究関心の潜在度 (数量化理論Ⅲ類第1軸)	② 研究関心の設定力 (数量化理論Ⅲ類第2軸)	③ 汎用的な情報収集行動 (第1主成分)	④ 専門的な情報収集行動 (第2主成分)	⑤ 進学先の一致 高3・10月時の志望と 大学のレポート執筆に 役立った	⑥ 未来航路プロジェクトは、 大学のプレゼンテーションに 役立った	⑦ 未来航路プロジェクトは、 希望する職業を考えるのに 役立った	⑧ 現在、将来就きたい職業が ある	⑨ 男子ダミー	⑩ 内進生ダミー	⑪ 蔵書数	⑫ 高校文系ダミー	⑬ 高校3年時の校内成績	⑭ 大学の学年	
①	1	-.001	-.034	-.118	-.030	-.128	-.152	-.220	-.145	.053	-.091	-.028	.128	-.096	-.010
②		1	.193	.029	.026	.192	.207	.136	-.071	-.105	.169	-.037	.108	.054	.104
③			1	.000	.009	.290	.338	.350	.058	-.324	.176	-.010	.063	-.031	.027
④				1	.181	.157	.132	.133	.106	-.041	.075	.054	-.105	.130	-.050
⑤					1	.098	-.006	.066	.083	.009	-.049	-.020	.015	.003	-.170
⑥						1	.748	.342	.072	-.157	.075	.018	.052	.075	-.087
⑦							1	.316	.123	-.139	.150	.097	.063	.107	.025
⑧								1	.239	-.253	.018	.068	.043	-.018	-.027
⑨									1	-.083	.013	-.019	-.103	-.006	.037
⑩										1	.097	-.002	-.229	.203	-.182
⑪											1	.146	-.144	.431	-.010
⑫												1	-.037	.053	-.102
⑬													1	-.130	.089
⑭														1	-.014
⑮															1

5%水準で有意な箇所には灰色を、10%水準で有意な箇所には下線を付している。

B 系統別課題研究のレリバンズ

1 志望と進学先のレリバンズ

志望と進学先が一致しやすいのは誰であろうか。分析結果を Table 10 に示している。

系統別課題研究の進め方として、専門的な情報収集行動をとっていた者は、志望と進学先が一致していると答えやすい。他方、大学の学年が進むほど、志望と進学先は一致していないと答えやすい。後者の解釈としては、以下の2つが考えられる。

第一に、卒業年度コーホートが異なることによる世代効果はないと仮定できれば、大学進学前の期待と進学後の現実との乖離は、大学在学期間が長くなるにつれて顕在化してくると言えるだろう。

第二に、高校3年生の10月時点で学びたかった学問分野と現在専攻している学問分野との一致度への認識が学年進行に伴い変化しない、すなわち年齢効果がないと仮定できれば、ここに世代効果が表れていると解釈することもできるだろう。つまり、岡山操山高校において未来航路プロジェクトの取り組みが定着してくるにつれて、最近卒業した世代ほど、志望と進学先が一致するという形で、高校3年生の進路選択がうまく行われるようになっている可能性がある。

Table 10 「高3・10月時の志望と進学先の一致」へのロジスティック回帰

	Exp(B)
研究関心の潜在度	.887
研究関心の設定力	1.130
汎用的な情報収集行動	1.092
専門的な情報収集行動	1.896 **
男子ダミー	1.042
内進生ダミー	.737
蔵書数	1.027
高校文系ダミー	.980
高3時の校内成績	1.066
大学の学年	.642 **
定数	15.958 **
n	243
Nagelkerke R2	.131

**p<.01 *p<.05 †p<.1(以下同様)

高3・10月の志望未定者は分析対象外。

ただし、これらの解釈の妥当性を検討する際には、回収された調査票に次のような自由記述が見られた

ことに留意するべきである。すなわち、系統別課題研究は推薦入試やAO入試に役立つという意見が、複数確認されている。これらの記述は、未来航路プロジェクトを通じた経験は大学入試に役立つものという認識を示すものであり、当該経験は大学卒業後の将来展望にまでつながりづらいことを含意している可能性がある。この点については、本節3項でも述べる。

2 大学の学習とのレリバンズ

次に、未来航路プロジェクトが大学の学習に役立つと感じているのは誰であるか、ということに答える。分析結果は Table 11 に示している。

Table 11 「未来航路プロジェクトは、大学のレポート執筆に役立った」への回帰(OLS)

	β
高3・10月の志望と進学先	
一致ダミー	.055
未定ダミー	-.025
(基準: 不一致)	
研究関心の潜在度	-.090
研究関心の設定力	.133 *
汎用的な情報収集行動	.175 **
専門的な情報収集行動	.111 †
男子ダミー	-.104
内進生ダミー	-.020
蔵書数	.034
高校文系ダミー	.037
高3時の校内成績	.094
大学の学年	-.108 †
(定数)	**
n	266
R2	.100
F	3.448 **

研究関心の設定力が高かった者、汎用的な情報収集行動をしていた者、専門的な情報収集行動をとっていた者は、未来航路プロジェクトは大学のレポート執筆に役立ったと考えている。

「未来航路プロジェクトは、大学でのプレゼンテーションに役立った」への回帰分析も、上の表と類似の結果が得られているが、研究関心の潜在度が有意(p<.05)に負と推定されていることが特徴的である。高校生の時点ではっきりとした研究関心を持っていなかった者は、大学でのプレゼンテーションに苦労している様子が窺われる。

3 将来展望とのレリバンス

最後に、未来航路プロジェクトの経験と将来展望を関連付けているのは誰か、という問いに対する分析結果を示す。

Table 12 「未来航路プロジェクトは、希望する職業を考えるのに役立つ」への回帰(OLS)

	β
高3・10月の志望と進学先	
一致ダミー	.042
未定ダミー	-.054
(基準: 不一致)	
研究関心の潜在度	-.198 **
研究関心の設定力	.079
汎用的な情報収集行動	.241 **
専門的な情報収集行動	.084
男子ダミー	-.140 *
内進生ダミー	-.042
蔵書数	.073
高校文系ダミー	.012
高3時の校内成績	.016
大学の学年	-.061
(定数)	**
n	267
R2	.163
F	5.320 **

Table 12 の標準化偏回帰係数の符号を確認すると、2 項の Table 11 と類似の結果を得ていることが分かるが、大きな違いが二か所ある。すなわち、研究関心の設定力、および専門的な情報収集行動の係数の推定値はそれぞれ、統計的に有意であるとは言えない。高校時代の系統別課題研究に取り組んでいるうちにテーマを設定できたという経験や、実験・アンケート調査を行ったという経験は、大学での学びに役立つという実感を伴うものであるとしても、希望する職業を考えるのに役立つという実感を伴うものではないと言える。このことは、Table 13 のロジスティック回帰分析からも読み取ることができる。

ただし、Table 12 を見ると汎用的情報収集行動の係数の推定値は有意となっており、汎用的情報収集行動は、将来展望とのレリバンスを有するよう見える。しかし、Table 13 が示しているように、「将来就きたい職業」の有無に直接関連しているわけではない。汎用的情報収集行動は、職業を考えるのに役立つという認識に関わっているものだとしても、就きたい

職業の有無という実態にまで結び付いているとは言えない。

Table 13 「現在、将来就きたい職業がある」へのロジスティック回帰

	Exp(B) (1)	Exp(B) (2)
高3・10月の志望と進学先		
一致ダミー	1.652	1.421
未定ダミー	.365 †	.305 *
(基準: 不一致)		
研究関心の潜在度	.817 †	.793 *
研究関心の設定力	.869	.862
汎用的な情報収集行動	.950	1.047
専門的な情報収集行動	1.240	1.217
男子ダミー	.656	
内進生ダミー	1.060	
蔵書数	.977	
高校文系ダミー	.687	
高3時の校内成績	1.026	
大学の学年	1.222	
定数	1.113	
n	267	294
Nagelkerke R2	.134	.104

高3年生の10月時点で学びたかった学問分野が決まっていなかった者は、将来就きたい職業がないと答える傾向が読み取れる。志望と進学先が一致している者としていない者との間には、有意差はなく、さらに、高校生の時に研究関心の潜在度が高かった者は、将来就きたい職業がないと回答しやすい。研究関心の設定力は、有意でない。未来航路プロジェクトを通じた研究関心の設定経験や、汎用的・専門的な情報収集行動経験は、将来就きたい職業の有無に対して、直接の関連がない。

既に触れた通り、岡山操山高校の未来航路プロジェクトを通じて経験した内容は、①大学での学習とのレリバンスを持つものとして卒業生から認識されているのに対して、②大学卒業後の将来展望を考えるのに役立つという実感を伴っているとは、必ずしも言えない。②の解釈は容易でないが、データから読み取れる範囲において2つの可能性を提示する。

大学卒業後の将来展望と直接の関連を持つのは、元々関心があるテーマがあったかどうかという、高校としては直接働きかけることが難しい条件である。当該条件は、本人が生来的に持っている固有な性質を意味しているのかもしれない。もしそうだとすれば、

本節の分析結果は、個人に固有の効果の一部を取り出していることになるのかもしれない。

他方、元々関心があるテーマの有無は、中学までの義務教育の成果を意味しているということも考えられる。この点の検討に資するデータが、調査票の自由記述内容の KJ 法的分類から得られている。紙幅の都合で分類結果の全容を図示することは困難だが、注目すべき特徴を一つ取り上げるとすれば、岡山操山高校の未来航路プロジェクトと、岡山操山中学校の未来航路プロジェクトとの違いを指摘する一群の存在であろう。たとえば、中学時代の卒業研究が大学受験と、その先にある職業につながっていったことを振り返っている記述があった。

このような自由回答の記述は、岡山操山中学の未来航路プロジェクトから得られた経験が充実していたことを示すものと言える。インタビューで校外に出るなどの自由度の高さを窺わせる記述もあった。その反面、岡山操山高校の未来航路プロジェクトには課題があることを指摘する記述は複数見られた。これらの記述は、高校の未来航路プロジェクトを通じて生徒が何かを経験する機会が、全ての生徒に均一に割り当てられているわけではない可能性を示唆している。本節では「内進生ダミー」によるコントロールを行っているが、そのような問題に対して、この対応だけでは不十分であろう。「高校の系統別課題研究は、量的にも質的にも中途半端になりました。岡山操山中学校の未来航路プロジェクトはすばらしかったので、そちらもしっかり研究してください」という自由記述の含意を、しっかりと受け止める必要がある。

(日下田岳史・鈴木翔・山口泰史)

5 まとめ

本稿では、第1次調査によって未来航路プロジェクトの「効果」に対する教師の認識を明らかにし、その知見を第2・3章に示した。本稿は特に、未来航路プロジェクトの探究学習に着目してきたが、その学習で生徒が設定するテーマと、大学の学習、将来展望とにレリバンスがあることが期待されていた。第2次調査は卒業生に対するアンケート調査を実施し、高校の未来航路プロジェクトの系統別課題研究の「効果」に対する生徒の認識を明らかとした。第4章に示した

知見を改めて提示する。まず第1に、系統別課題研究の進め方として、専門的な情報収集行動をとっていた者ほど、志望学問分野と進学先学問分野が一致していると答えている、という知見が得られた。第2に、岡山操山高校の未来航路プロジェクトは大学の学習⁽¹¹⁾とレリバンスをもつことが明らかとなった。そして第3に、岡山操山高校の未来航路プロジェクトは大学卒業後の将来展望を考えるのに役立つという実感が必ずしもあるとは言えない、という結果が得られた。

これらの知見を、主に3章を踏まえ、改めて考察する。第1, 2の知見のなかで特に重要視した未来航路プロジェクトの変数は、専門的な情報収集行動であった。しかしこの学習行動はすべての生徒に対して均一に機会が割り当てられているものではない可能性がある。この点は、第4章B節3項でも指摘した。第3章では、中学校と高校の未来航路プロジェクトの違いを5点示したが、そこでは研究環境・設備の違いも指摘した。その際、高校の未来航路プロジェクト担当の教師はすべての生徒が実験や実地研究を行えるわけではない、という限界について触れている。今後の方策として特に高校において、専門的な情報収集行動をとれる機会を、すべての生徒に与えることができる施策が望まれる。一方で、汎用的な情報収集行動は、専門的な情報収集行動に比べ、特別な研究環境・設備、教師のサポートが必要ない。さらに、大学の学習・将来展望とのレリバンスに対しても一定程度、影響を認めることができた。今後も継続して教育活動に盛り込んでいく意義があるだろう。

第3の知見で重要な点は、大学卒業後の将来展望と直接の関連を持つのは、もともと関心のあるテーマがあったかどうかという、高校としては直接働きかけることが難しい条件が存在していることである。第4章B節3項で述べたように、その条件にはさらに2通りの解釈があり、本人が生来的に持っている固有な性質の場合と、中学までの義務教育の成果である場合を示した。どちらの解釈が有効であるかは調査設計上限界があり、本稿では明らかにできなかった⁽¹²⁾。今後の課題としたい。

以上3つの知見に加え、言及しておくべき重要な知見がある。第4章で示した分析では、いずれも「内進生ダミー」を説明変数として投入していた。その理由は、未来航路プロジェクトと大学の学習・将来展望

とのレリバンスに対する諸変数の影響が、内進生／外進生の違いによる影響を取り除いてもみられるのかを検証するためだった。その検証の結果はすでに述べた。

ここで確認したいのは、すべての分析において、内進生／外進生の違いが、大学の学習、将来展望とのレリバンスに直接的に影響を及ぼすことは認められなかったことである。この結果は、高校において、内進生と外進生の「差」をなだらかにしていることの表れとも受け止められる。また、岡山操山中学校の未来航路プロジェクトが「効果的」だったとする生徒の認識が、自由記述回答において一群見受けられることを踏まえれば、内進生が中学校段階までの成果を高校で活かしていない、とも解釈することができる。この点に関しても、どちらが有効な解釈であるか、本稿のアンケート調査で明らかにすることはできなかった。中学校の未来航路プロジェクトの実施状況について、より丹念に調査することが課題である。

本稿は、岡山操山中学校・高校を事例とし、「公立中高一貫校における探究学習」を多角的に捉えることを試みた。探究学習に対する共通理解がまだ確立されない状態で、果敢に実践している岡山操山中学校・高校の実態を、学習内容、学習を組織する教師集団の認識に触れながら示してきた。また、生徒の卒業後の認識についても明らかにしたことは本稿の最大の成果である。もちろん、本稿で明らかにしたことは、岡山操山中学校・高校の一部分に過ぎない。今後さらに、本プロジェクトの調査で得られたデータの分析を進め、中学校・高校が働きかけることのできる要因、働きかけることが可能なレリバンスを探求していきたい。

(富田知世)

(指導教員： 本田由紀教授)

<注>

(1) 未来航路プロジェクト以外に、岡山操山高校が「特色ある取組」としてうたっていることが、単位制、先取り学習を行わない、ミックスホームルームの 3 点である。単位制であるのは、生徒の多様な進路選択に対応し、能力に応じた学習内容や学習進度が選択できるような仕組みを整えるためである。国語と数学には「速習」・「標準」科目を設置している。ミックスホ

ームルームとは、操山中学校から入学してくる生徒と、それ以外の中学校から進学してくる生徒の混合クラスを指している。

(2) その他に行った調査を説明する。7 月のインタビュー調査では、各教科主任も対象とした。各教科主任には教科の授業と未来航路プロジェクトのつながりについて聞いている。本稿では、各教科主任のインタビューデータは分析には含めなかった。さらに卒業生へのアンケート調査を実施する前に、すでに岡山操山高校が行っているアンケートや外部模試偏差値、進路先情報などを用いた 2 次分析を行った。未来航路プロジェクトの積極性と学力、学習時間、志望実現との関連を検証している。

(3) 岡山操山中学校の生徒数は 120 名、岡山操山高校は当該 120 名に他中学校から 160 名を加えた 280 名が在籍している。

(4) 中学校のパンフレットには、「高い志」の下に、未来航路プロジェクトと学校独自設定教科の「コミュニケーション」の説明が、「確かな学力」の下に、少人数授業、ティームティーチング、英会話指導、放課後の質問教室、社会人講師の説明が、そして「豊かな心」の下に、異年齢集団による学び、体験学習、絵本作成プログラム、ピア・サポート、ボランティアの説明が並んでいる。高校のパンフレットには、「高い志」の下に、未来航路プロジェクトの説明が、「確かな学力」の下には、「一人ひとりの学力を“伸ばす”授業」、「個性や才能を伸ばす多様なカリキュラム」、「目指す大学への進学をサポートする指導体制」という説明が、そして「豊かな心」の下には、様々な学校行事が写真付きで列挙されている。

(5) 「社会力」が共有されなくなった理由について A 先生は、異動による教師集団の変化をあげている。それは、ベテランの教師が抜けたということに加え、「社会力」育成の提唱者として中心的存在となっていた教師の異動を A 先生は指していた。その提唱者が異動をすることになり、学校外部の者(他の中学校や保護者に対してなどが挙げられていた)に対して他の教師が「社会力」の定義をわかりやすく説明することが困難となった。A 先生も定義がメモされている資料を持って来れば説明できるが、すぐに説明はできないという。したがって、「社会力」にかわり、より分かりやすい言葉が次第に学校の教育目標として前面に

出てくることになった。

(6) 中学校・高校の両校で指摘された困難さは、生徒の個人差への対応である。また、中学校でも同様に困難である可能性として、教師の配置問題がある。未来航路プロジェクトは学年単位で実施されるが、系統別課題研究の際は、系統別に教師を数人配置する。同学年担任内の限られた人数で配置するため、教師の担当教科と配置される系統にかならずしも関連があるとは限らない。このような限界をもともと内包していることもあるが、教師は、研究内容を指導することではなく、「研究するとはどういうことか」ということを理解させる、研究方法の支援をするという役割が与えられることになる。

(7) この感覚には、未来航路プロジェクトではぐくみたい「力」と、数値で測れる「力」にはつながりがない、との意識が反映されている。また、未来航路プロジェクトは総合的な学習の時間で行われるが、数値で測れる「力」の育成は教科の時間でなされるという役割分担の意識も強く存在している。各教科主任の教師にもインタビューを行ったが、未来航路プロジェクトとの関連を積極的に意識する教師は少なかった。一方、中学校の教師、前述した E 先生は、未来航路プロジェクトではぐくみたい「力」と、数値で測れる「力」との関連を意識していた。

(8) コミュニケーション能力とは、簡単に説明すれば、弁論やディベートといった、グループ活動へかかわる能力と考えられる。プレゼンテーション能力とは、成果を発表する場面におけるその振る舞い方にかかわる能力と考えられる。これらの能力も未来航路プロジェクトにおいては重要視されている者であるが、これら能力に対する未来航路プロジェクトの影響についての分析は、別の機会に改める。

(9) 岡山操山中学校の未来航路プロジェクトに関する質問項目も用意したが、大学生に対して求める、中学時に関する回顧的回答に含まれる歪みを考慮し、より記憶に新しい高校での未来航路プロジェクトに関する項目を分析の変数として用いている。

(10) 将来就きたい職業がある人に対して、就きたい職業と現在専攻している学問分野との関連を 4 件法で尋ねたところ、「とても関連がある」または「まあ関連がある」と回答した者は 92.2% に上っている (n=179)。

(11) 本稿の分析で用いた「大学の学習」とは大学で

のレポート執筆とプレゼンテーションにのみ着目したものであり、大学での学習を網羅したものではないことは注意が必要である。しかしながら大学での学習においてレポート執筆やプレゼンテーションは非常に重要な要素であることは確かである。

(12) 本稿のアンケート調査では、このどちらの場合かを判別するには限界があった。本人の生来的な固有の要因をコントロール可能にするには、中学生段階から、追跡的に調査するパネル調査形式が有効である。

<引用文献>

- 1) 安藤福光 2005 中高一貫校のカリキュラム開発とその教員組織に関する調査研究—カリキュラム・アーティキュレーション論の視点から— カリキュラム研究 第 14 号 pp. 75-88
- 2) 安藤福光・根津朋実 2010 公立小中一貫校の動向にみる「カリキュラム・アーティキュレーション」の課題 教育学研究 第 77 巻 第 2 号 pp. 53-64
- 3) ベネッセコーポレーション『高等学校における「総合的な学習の時間」の課題と展望——中・高校生の意識と「総合的な学習」実践事例の分析より』ベネッセ文教総研 1999
- 4) 井島秀樹 2005 公立中高一貫教育校の現状と課題—中等教育学校及び併設型中高一貫教育校へのアンケート調査を通して— 教育行財政論叢 9 pp. 97-111
- 5) 梶間みどり 1998 中等教育改革における『中高一貫教育』と『中高連携教育』の意義と課題—『特色ある学校』づくりと『効果的な学校』の視点 日本教育経営学会紀要 40 pp. 109-121
- 6) 荻谷剛彦・平沢和司・堀健志・安藤理 2006 知能・学力・職業キャリア—中高一貫校卒業生データから— 日本教育学会大会発表要旨集 58 pp. 361-366
- 7) 菊池栄治 1998 中高一貫校の言説と実践—教育経営研究の行方 日本教育経営学会紀要 40 pp. 28-37
- 8) 文部科学省 2008 中学校学習指導要領 総合的な学習の時間 解説編
- 9) 文部科学省 2009 高等学校学習指導要領 総合的な学習の時間 解説編

- 10) 西島央 2011 『公立中高一貫校中学生の生活・意識・行動に関する調査』報告 人文学報 教育 46 pp. 57-80
- 11) 岡島卓也 2009 併設型中高一貫教育校の教育機能に関する研究—『学習意欲』と『ゆとり』を両立する生徒の実態から 学校教育研究 24 pp. 99-111
- 12) 大脇康弘 2001 中高一貫教育の批判的考察—構想の具体化と制度論的意味— 大阪教育大学教育研究所報 36 pp.1-11
- 13) 清水一彦 2001 学校教育制度におけるアーティキュレーションの問題—課題意識の変容と教育課題— 教育制度学研究 8 pp.8-23
- 14) 田中洋 2006 公立中高一貫校の現状 琉球大学教育学部紀要 68 pp. 273-284
- 15) 富田知世 2011 大学・高校での授業経験と大学生の能動的学習行動—大学におけるキャリア教育と高校における課題探究学習に着目して— 東京大学教育学部比較教育社会学コース 大学生なう pp. 39-50
- 16) 山田礼子 2011 大学からみた高校との接続—教育接続の課題— 高等教育研究 第14集 pp. 23-46

*本プロジェクトの研究費は一部、岡山操山中学校・高校からの助成を受けている。岡山までの旅費、アンケート調査の印刷費、郵送費を援助いただいた。

<資料:アンケート項目掲載>

岡山県立岡山操山中学・高校の教育を検証するためのアンケート

●はじめにあなた自身の基本的なことからについてお聞きます。

Q01 あなた自身に関して、A・B・E～Gについてはあてはまる番号1つに○をつけ、A・C・Dについて、()内に数字を記入してください。きょうだいがいない場合は、Dのすべての()内に0と記入してください。

- A. 所属など 1. 大学生()年 2. 短大生()年 3. 専門学校生()年 4. その他
B. 性別 1. 男 2. 女
C. 年齢 ()歳
D. きょうだい 兄()人 弟()人 姉()人 妹()人
E. 現在のお住まい 1. 実家 2. 一人暮らし 3. アパート・寮などで共同生活 4. その他()
F. 高校時代の所属コース 1. 文系 2. 理系
G. 出身中学校 1. 岡山操山中学校 2. 岡山市立の中学校 3. その他の中学校

Q02 あなたの通っている大学に関して、A・Bについては()内に名称を記入し、C～Fそれぞれについては、あてはまる番号1つに○をつけてください。

- A. 大学名 ()大学
B. 学部・学科名 ()学部()学科
C. 学年 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. その他()
D. 浪人などの経験 1. 現役 2. 一浪 3. 二浪以上 4. その他()
E. 入学形態 1. 一般入試 2. センター試験のみを利用する入試 3. 指定校推薦 4. 一般推薦 5. AO入試 6. その他()
F. 入学希望度 1. ぜひこの大学に入学したかった 2. もっと入学したい大学が他にあった
3. 特にどこの大学に入学したいということはなかった

Q03 高校3年生10月時点で志望していた大学と、現在あなたが通っている大学は一致していますか。

1. 一致している 2. 一致していない 3. 10月時点で志望校は決まっていなかった

Q04 Q03で1・2に回答した方のみにお聞きます。志望大学はいつごろ決めましたか。

1. 高校入学以前 2. 高校1年生のとき 3. 高校2年生のとき 4. 高校3年生のとき

Q05 3年生10月時点で学びたかった学問分野と現在専攻している学問分野は一致していますか。

1. 一致している 2. 一致していない 3. 10月時点で学問分野は決まっていなかった

Q06 Q05で1・2に回答した方のみにお聞きます。学びたい学問分野はいつごろ決めましたか。

1. 高校入学以前 2. 高校1年生のとき 3. 高校2年生のとき 4. 高校3年生のとき

●大学学習・生活等についてお聞きます。

Q07 あなたは大学の演習・実験・実習形式の授業中で、次のことをどれくらいしていますか。A～Fそれぞれについて、あてはまる番号(1. よくする 2. まあする 3. あまりしない 4. まったくしない 5. 受けたことがない)1つに○をつけてください。

- A. グループ内のメンバーの意見をまとめる B. 自分から積極的に意見を提案する
C. 学習の成果を授業の履修者や研究室のメンバーに発表する
D. 他のメンバーが方針を決めてくれるのを待っている
E. 他の人の意見について補足やアドバイスをする F. 自分と違う意見を持っている人を説得する

Q08 あなたが大学生になってから半年以上参加した(している)部・サークル・団体・組織は次のうちどれですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。また、「5. 部・サークル以外の団体・組織」に○をつけた方はどのような活動をする団体かも具体的にお答えください。

1. 体育会系部活動 2. 文化系部活動 3. 運動系サークル 4. 文化系サークル
5. 部・サークル以外の団体・組織(具体的に:) 6. 参加していない

Q09 あなたには次のことがどれくらいあてはまりますか。A～Hそれぞれについて、あてはまる番号(1. とてもあてはまる 2. まああてはまる 3. あまりあてはまらない 4. まったくあてはまらない)1つに○をつけてください。

- A. 大学での学問に積極的に取り組んでいる B. 大学の授業内容を十分理解している
C. 大学の授業に満足している D. 大学での学問に関心をもっている
E. 自分の専攻以外の学問分野にも興味がある F. 大学の友人に満足している
G. 体調をくずすことがよくある H. 大学生活全般に満足している

Q10 あなたの考えは、左右のどちらにより近いですか。A～Dそれぞれについて、あてはまる番号(1. 左に近い 2. まあ左に近い 3. まあ右に近い 4. 右に近い)1つに○をつけてください。

- A 【左】あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業が良い
【右】単位を取るのが難しくても、自分の興味のある授業がよい
- B 【左】出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい
【右】試験や論文・レポートなどを重視して成績評価する授業がよい
- C 【左】教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい
【右】学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい

D【左】大学での学習方法は大学の授業で指導を受けるのが良い

【右】大学での学習方法は、学生が自分で工夫するのが良い

Q11 大学での学習方法についてお聞きます。次のことがどれくらいあてはまりますか。A～Fそれぞれについて、あてはまる番号(1. とてもあてはまる 2. まああてはまる 3. あまりあてはまらない 4. まったくあてはまらない)1つに○をつけてください。

- A. 以前に学習したことを覚えているかチェックしている
- B. 自分がよくわかっていない箇所を把握しようとしている
- C. 学んだことを日常生活にどう応用できるかを考えている
- D. ある分野の学習に取り組むとき、他の分野にも応用できるかを考えている
- E. できるだけ暗記しようとしている
- F. 授業で出された課題以外にも自主的に勉強している

Q12 あなたは平日1日あたりに、次のことをどれくらいしていますか。A～Eそれぞれについて、あてはまる番号(1. まったくしない 2. 30分くらい 3. 1時間くらい 4. 2時間くらい 5. 3時間以上)1つに○をつけてください。

- A. 本を読む(マンガや雑誌を除く)
- B. メールや電話, SNSをする
- C. 大学の授業外で勉強をする
- D. サークル・部活動に参加する
- E. アルバイトをする

●高校生の時の学習・生活等についてお聞きます。

Q13 あなたは高校2年生のとき、平日1日あたりに、次のことをどれくらいしていましたか。A～Dそれぞれについて、あてはまる番号(1. まったくしない 2. 30分くらい 3. 1時間くらい 4. 2時間くらい 5. 3時間以上)1つに○をつけてください。

- A. 本を読む(マンガや雑誌を除く)
- B. メールや電話, SNSをする
- C. 学校の授業外で勉強をする
- D. 部活動に参加する

Q14 あなたは高校で、次のような国語・地歴・公民・数学・理科・英語の授業を受けましたか。A～Fそれぞれについて、あてはまる番号(1. たくさん受けた 2. まあ受けた 3. 少しだけ受けた 4. 受けたことがない)1つに○をつけてください。

- A. 教師の説明をずっと聞いている授業
- B. 確認テストや小テストが頻繁にある授業
- C. グループで協力して課題を達成する授業
- D. 議論をしたり意見を発表しあったりする授業
- E. 調査や実験をしてレポートなどにまとめる授業
- F. 日常生活や科学技術と学習内容を関連づける授業

Q15 あなたは高校生のとき、次のことに積極的に取り組んでいましたか。A～Hそれぞれについて、あてはまる番号(1. とても積極的 2. まあ積極的 3. あまり積極的でない 4. まったく積極的でない ※G, H. については「5. していない」がある)1つに○をつけてください。

- A. 英語・数学・国語・理科・地歴・公民の勉強
- B. 芸術(音楽・美術・書道など)の授業
- C. 家庭の授業
- D. 体育の授業
- E. 情報の授業
- F. 松柏祭
- G. 部活動
- H. 委員会活動(図書委員, 放送委員など)

Q16 あなたが高校生のときの勉強方法についてお聞きます。次のことがどれくらいあてはまりましたか。A～Eそれぞれについて、あてはまる番号(1. とてもあてはまる 2. まああてはまる 3. あまりあてはまらない 4. まったくあてはまらない)1つに○をつけてください。

- A. 以前に学習したことを覚えているかチェックしていた
- B. 自分がよくわかっていない箇所を把握しようとしていた
- C. 学んだことを日常生活にどう応用できるかを考えていた
- D. 問題を解くとき、他の問題にも応用できるかを考えていた
- E. 保護者や先生に言われなくても自主的に勉強した

Q17 あなたが高校生のとき、1年間以上参加していた部活動・生徒会活動は次のうちどれですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

- 1. 運動部
- 2. 文化部
- 3. 生徒会役員
- 4. 参加していない

Q18 あなたは高校生のとき、次のことがどれくらいあてはまりましたか。A～Jそれぞれについて、あてはまる番号(1. とてもあてはまる 2. まああてはまる 3. あまりあてはまらない 4. まったくあてはまらない)1つに○をつけてください。

- A. 学校の授業内容を十分理解していた
- B. 学校の授業に満足していた
- C. 学校での学習内容に関心をもっていた
- D. 学校の友人に満足していた
- E. クラスのなかで人気者だった
- F. 学校生活全般に満足していた
- G. 体調をくずすことがよくあった
- H. 進路選択の際、授業料が低い大学・学部を探した
- I. 文系の学習内容に興味があった
- J. 理系の学習内容に興味があった

Q19 あなたは高校生のときに、次の進路指導を学校でどの程度受けましたか。A～Dそれぞれについて、あてはまる番号(1. よく受けた 2. 何度か受けた 3. あまり受けなかった 4. まったく受けなかった)1つに○をつけてください。

- A. 自分の学力レベルよりも上の大学を目指す指導
- B. 自分の学力レベルに合った大学を目指す指導
- C. 自分のやりたいことを尊重した指導
- D. 先生が進路を積極的に提示する指導

Q20 小学生・中学生・高校生のとき、あなたの成績は校内でどれくらいでしたか。A～Cそれぞれについて、あてはまる番号1つ(1. 下のほう 2. やや下のほう 3. 中くらい 4. やや上のほう 5. 上のほう)に○をつけてください。

- A. 小学6年生のとき
- B. 中学3年生のとき
- C. 高校3年生のとき

●高校生のときの未来航路プロジェクトについてお聞きます。

Q21 あなたは高校生のときに、未来航路プロジェクトで、次のことに積極的に取り組んでいましたか。A～Eそれぞれについて、あてはまる番号(1. とても積極的 2. まあ積極的 3. あまり積極的でない 4. まったく積極的でない)1つに○をつけてください。

- A. 弁論大会 B. 学問研究 C. ディベート D. 職業研究 E. 異文化理解

Q22 あなたは高校生のときに、未来航路プロジェクトのグループ活動で、次のことをどれくらいしましたか。A～Fそれぞれについて、あてはまる番号(1. とてもした 2. まあした 3. あまりしなかった 4. まったくしなかった)1つに○をつけてください。

- A. グループ内のメンバーの意見をまとめた B. 自分から積極的に意見を提案した
C. 活動の成果をクラスまたは学年の前で発表した D. 他のメンバーが方針を決めてくれるのを待った
E. 他の人の意見について補足やアドバイスをした F. 自分と違う意見を持っている人を説得した

Q23 高校生のときの未来航路プロジェクトの系統別課題研究についてお聞きます。論文作成の際に、次のことをどれくらいしましたか。A～Gそれぞれについて、あてはまる番号(1. とてもした 2. まあした 3. あまりしなかった 4. まったくしなかった)1つに○をつけてください。

- A. 本を読む B. 友達に相談する C. 先生に相談する D. 親に相談する
E. インターネットで調べる F. 学外の専門家に相談する G. 実験・アンケート調査を行う

Q24 高校生のときの未来航路プロジェクトの系統別課題研究テーマについてお聞きます。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1. もともと関心があるテーマがあった 2. 課題研究に取り組むうちに関心のあるテーマを見つけた
3. 他の人にテーマを決めてもらった 4. 独自性のあるテーマを見つけられた
5. なかなかテーマが決まらなかった 6. 途中でテーマを変更した
7. 大学で学びたい学問分野と関連のあるテーマだった 8. その他()

Q25 高校時代、あなたは未来航路プロジェクト全般について、次のことがどれくらいあてはまりましたか。A～Hそれぞれについて、あてはまる番号(1. とてもあてはまる 2. まああてはまる 3. あまりあてはまらない 4. まったくあてはまらない)1つに○をつけてください。

- A. 積極的に取り組んだ B. 全体的に満足した C. 授業時間外にも自主的に取り組んだ
D. 学習意欲につながった E. 高校卒業後の進路選択に役立った F. 希望する職業を考えるのに役立った
G. 大学のレポート執筆に役立った H. 大学でのプレゼンテーションに役立った

Q26 【この項目は、岡山操山中学校から進学した方(内進生)のみお答えください】あなたは中学生のときに、次のことに積極的に取り組んでいましたか。A~Dそれぞれについて、あてはまる番号(1. とても積極的 2. まあ積極的 3. あまり積極的でない 4. まったく積極的でない)1つに○をつけてください。

A. 卒業研究 B. イングリッシュサマーキャンプ C. デイバート D. 中学3年レクチャー

●現在の意識行動についてお聞きます。

Q27 あなたは将来就きたい職業が明確にありますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。また、あると答えた方はその職業を具体的にお書きください。

1. ある (具体的な職業名:) 2. ない

Q28 Q27で「1. ある」と回答した方にお聞きます。将来就きたい職業は現在専攻している学問分野とどれくらい関連がありますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

1. とても関連がある 2. まあ関連がある 3. あまり関連がない 4. まったく関連がない

Q29 将来について、次のことはあなたにどれくらいあてはまりますか。A~Gそれぞれについて、あてはまる番号(1. とてもあてはまる 2. まああてはまる 3. あまりあてはまらない 4. まったくあてはまらない)1つに○をつけてください。

A. 地元で働きたい B. 日本で働きたい C. 海外で働きたい
D. リーダーとして社会に貢献する人材になりたい E. 社会の一員として社会に貢献する人材になりたい
F. 自分の夢ややりたいことを実現するためならすぐに就職しなくてもかまわない
G. 他の人から評価されなくてもボランティア活動をしたい

Q30 Q29のAで「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した方にお聞きます。そのような思いを持つようになったのはいつからですか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

1. 高校入学以前 2. 高校在学時 3. 大学在学時(就職活動前) 4. 大学在学時(就職活動中)

Q31 Q29のAで「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した方にお聞きます。そのような思いを持った理由は何ですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1. 就きたい職場があるから 2. 仲の良い友達がいるから 3. 家族がいるから 4. 地元で貢献したいから5.
都会は自分には合わないと感じるから 6. 家族が地元での就職を望むから 7. その他()

Q32 あなたの考えは、左右のどちらにより近いですか。A～Cそれぞれについて、あてはまる番号(1. 左に近い 2. まあ左に近い 3. まあ右に近い 4. 右に近い)1つに○をつけてください。

A. 大学教育の費用について

【左】大学教育の費用は税金で負担するべきだ

【右】大学教育の費用は教育を受ける個人または家族が負担するべきだ

B. 子育ての費用について

【左】子育て費用は税金で負担するべきだ

【右】子育て費用は家庭が負担するべきだ

C. 学校・大学を出た後、働いていない若者が働いていない理由について

【左】本人の意欲が足りないから働いていない

【右】本人の意欲以外の理由(働く先がないなど)があつて働いていない

Q33 あなたには現在、定期的に会うような友人がどれくらいいますか。A～Dそれぞれについて、あてはまる番号(1. 0人 2. 1～5人 3. 6～10人 4. 11～20人 5. 21人以上)1つに○をつけてください。

A. 高校卒業以降にできた友人

B. 高校時代の友人

C. 中学校時代の友人

D. 中学校入学以前にできた友人

Q34 あなたには、次のことがどれくらいあてはまりますか。A～Fそれぞれについて、あてはまる番号(1. とてもあてはまる 2. まああてはまる 3. あまりあてはまらない 4. まったくあてはまらない)1つに○をつけてください。

A. 自分の意見を筋道を立てて人に説明する

B. 周囲の人の立場や状況を考えながら行動する

C. 必要だと感じたら自主的に行動する

D. 難しいことでも先延ばしせず、すぐに判断する

E. いったん引き受けたら最後までやり遂げる

F. 自分には人よりすぐれたところがある

Q35 あなたの実家には、本(マンガ・雑誌・学習参考書以外)はどれくらいありますか。あなたの家族の本も含みます。あてはまる番号1つに○をつけてください。

1. ほとんどない

2. 20冊くらい

3. 50冊くらい

4. 100冊くらい

5. 200冊くらい

6. 300冊くらい

7. 400冊以上

★岡山操山高校の未来航路プロジェクトについてご意見があれば、ご自由にお書きください。